

## 法然思想の受容をめぐつて——『松虫鈴虫讃嘆文』を中心に——

大久保 慶子

### 一、はじめに

室町時代から江戸時代初期にかけて成立した四百種を超える短編物語「お伽草子」<sup>(1)</sup>の一種である『松虫鈴虫讃嘆文』は、成立年代や作者については未詳であるが、これまでに赤木文庫旧蔵の室町時代末期頃の写本のみが確認されており、また、<sup>(2)</sup>同年代に成立したとされる伝本には、専想寺に所蔵されている『松虫鈴虫物語』<sup>(3)</sup>があり、どちらの物語が先に成立したのかについては定かでないが、ともに浄土宗の宗祖である法然上人（以下、すべての尊称を省略する）が、建久元年（一一九〇）に清水寺で説法したとされる出来事<sup>(4)</sup>と、建永二年（一二〇七）に讃岐国に配流された「建永の法難（もしくは「承元の法難」<sup>(5)</sup>）」という専修念仏の弾圧事件を題材にしている物語であり、物語の梗概については次の通りである。

建久元年（一一九〇）七月十五日、法然は清水寺で「往生の執因」を談ずるついでに「出家の功德」を讃嘆した。この説法を聴聞していた一条今出河の左大臣の御内である松虫・鈴虫という二人の女性は、これまでの栄華の日々から地獄を厭いて出家を決意し、その日の夜のうちに御所を出て、法然から戒を授かり出家する。後

日、帝は二人の出家を知り、出家を許した人物を搜索すると、その人物が法然であると判明し、流罪に処すことを定める。法然もこの仰せに従うが、この由を聞いていた弟子の住蓮（本文では「住連」）は、法然の身代わりとして罰を受けることを決意し、別れを告げるために母の家を訪れるが、母の説得によって身代わりを諦める。しかし、法然と父母兄弟を救うために再び決意し、住蓮は二人の出家を許可した者であると名乗り出て捕えられる。そして、法然に辞世の句を書き遺し、近江国の馬淵にて三十九歳で処刑される。後日、文を受け取った法然は、住蓮の母にもこの文を送るが、母は住蓮の死を嘆き悲しみ、遺骸を形見にしようと近江国に向うが、途中の石山で亡くなった。

『松虫鈴虫讃嘆文』の先行研究では、この物語が浄土宗もしくは浄土教系の談義の場で用いるためにつくられた「談義本」<sup>(6)</sup>としての要素があると指摘されてきたが、この物語を「談義本」<sup>(7)</sup>として捉える要因となっている法然の説法については、内容に関する考察を含め、これまでに十分な議論はなされてこなかった。

本論では、『松虫鈴虫讃嘆文』における法然の説法のうち、特に子細に記されている「出家の功德」の内容について検討した上で、法然の法語類などと比較することによって、物語の中でどのような「法然思想」が形成され、人々に受容されていたのかについて考察してみたい。

## 二、『松虫鈴虫讃嘆文』における法然の説法について

『松虫鈴虫讃嘆文』における法然の説法では、「往生の執因」を談ずるついでに「出家の功德」を讃嘆したとされているが、「往生の執因」の内容に関しては一切記されておらず、放逸邪見の衆生であつても頭を剃り、衣を墨に

染めようとするものは、当来の導師である弥勒菩薩に付属されると説かれていることから、法然は「出家ノ功德ハ、スクレタリト、オホユルナリ」<sup>(8)</sup>と述べた上で、地藏菩薩と獄卒の問答を用いながら「出家の功德」について説示しており、まず問答の前半部分については、次のように記されている。

ナカンツクニ、六道能化ノ地藏菩薩ト、獄卒ト、問答シタマフコトアリ、コヽニ、アル罪人ヲ、地藏ハ、地獄ニオトサント、ノタマフ、獄卒ハ、オトサシト申、コレ大ナル不審ナリ、六道ノ能化地藏ハ、阿弥陀如来ノ分身トシテ、ワカ名ヲトナヘン、衆生ノ苦ニカハリテ、ワレ地獄ニオツルトモ、罪人ヲオトサシト、チカヒテ、六道ノツチニ、タチタマヘル菩薩、ナニノユヘニ、コノ罪人一人ニカキリテ、地獄ヘオトサント、オホセラレサフラフソト申、又、コトニ、サウヲヨセテ、罪人ヲ、カシヤクセント、オモフモノヽ、ナニノユヘニ、コノ罪人ハカリヲ、獄卒ノ、地獄ヘオトサシト、申ソト、ノタマフニ<sup>(9)</sup>

問答の前半部分では、地藏菩薩がある罪人を地獄におとすと言うが、獄卒は地獄におとさないと言っており、ここでは、衆生の苦に代わって地獄におちることを誓い六道の辻に立つ菩薩が、何故この罪人一人に限って地獄におとすのかという疑問が投げかけられている。そして、問答の後半部分においては、次のように記されている。

コレハ、ムカシ天竺ニ、九乱女トイフ女人ナリ、男ホカヘユキタルアトニ、修行者ノ僧来テ、出家ノ功德ヲ、トクヲキヽテ、一念發起菩提心ヲ、オコシテ、男ヲ、マタスシテ出家シオハリヌ、ソノノチ、男カヘリテ、女房ノスカタヲ見テ、成スルニヨリテ、カミヲオヤシテ、又女トナリヌ、コレニヨリテ、獄卒ニ、カシヤクセラレテ、閻魔王ノマヘニ、ヒサマツキケルハ、コノ罪人ノコトナリ、タトヒ、罪業深重ノ衆生ナリトモ、カタシケナクモ、大乘セチェノ、カミソリヲ、カウヘニアテヌルモノヽ、地獄ニ墮ヌレハ、ソノ地獄ノ釜ヤフレテ、ソノ中ノ罪人ノ、数ヲモラサス、一度ニ、善所ニ生スルカユヘニ、コノクラン女一人、地獄ヘオチタラハ、地

獄ノ釜破テ、ノコリノ罪人ヲ、仏ケニ、ナサンカタメニ、地藏ハ、地獄ヘオトサント、ノタマフ、獄卒ハ、通カノモノナレハ、衆生カ、善所ヘ生スヘシトテ地獄ヘ、オトサシト申<sup>(10)</sup>

ある罪人と言っていた人物は、天竺の「九乱女」という女性であり、修行僧の「出家の功德」を聴聞したことによつて一念発起し、男性の帰りを待たずに出家したが、帰宅した男性に制されて「カミヲオヤシテ、又女トナリヌ」となったことから、獄卒に呵責されて閻魔王の前に跪いている「罪人」であるとされており、「還俗」という行為が地獄におちる罪の一つとして捉えられていると思われる。

一般的に還俗とは、一度僧籍に入つた者が元の俗人に戻ることであり、『平家物語』では、比叡山の座主の明雲に対して「同十八日、太政大臣以下の公卿十三人、参内して陣の座につき、先の座主罪科の事儀定あり。(中略)僧を罪する習とて、度縁を召し返し、還俗せさせ奉り、大納言大輔、藤井の松枝と、俗名をぞつけられける。」<sup>(11)</sup>とあり、刑罰としての還俗が科せられたとされているが、後にこの行為が原因となつて墮獄したとは記されていない。しかし、日蓮に仮託して作られたとされる『出家功德御書』には、「大勢至經に云く、『衆生五の失あり、必ず惡道に墮ちん。一には出家還俗の失なり。』又云く、『出家の還俗は其の失五逆に過ぎたり』。(中略) 然るに今宿善薰発して出家せる人の、還俗の心付きて落つるならば、彼の五逆罪の人よりも罪深くして、大地獄に墮つべしと申す經文なり。」<sup>(12)</sup>とあり、經文を引用しながら、還俗は五逆罪よりも罪が深いので大地獄におちると明言されている。また、法然が女性からの質問に答えた問答を集めたものとされている『一百四十五箇条問答』では、「一。還俗を心ならずして候はんは、いかに。答。あさくや。」<sup>(13)</sup>とあり、還俗を心ならずに行つた場合は、その罪は浅いと答えているが、他の問答には「一。尼法師、かみをおほす、つみにて候か。答。三惡道の業にて候。」<sup>(14)</sup>とあることから、尼法師が髪を伸ばすという行為については、三惡道の業であると厳しく答えており、法然が尼法師に戒律を厳守さ

せようとする姿勢がうかがえる<sup>(15)</sup>。そして、これらの『出家功德御書』や『一百四十五箇条問答』などによって、還俗という行為が「罪」であると認識されていくことにより、『松虫鈴虫讃嘆文』の問答では、九乱女のように個人的な理由ですぐに還俗した者は、その罪によって墮獄するという悪業の思想が説かれていると思われるが、大乘の剃刀を頭に当てた者が地獄におちることによって、地獄の釜が割れて中の罪人を一度に往生させることができるので、地藏菩薩は九乱女一人だけを地獄におとすと言っていることから、物語では、九乱女のように還俗した罪人であっても「出家の功德」は消滅せず、その功德は地獄にいる他の罪人を一度に救済できるほど優れているという思想が説き示されていると考えられる。更に、法然の説法を聴聞した松虫・鈴虫がこれまでの栄華の日々で犯した多くの罪を懺悔し、地獄におちることを厭う場面では、

シカルニ今日、サイハヒニ、大乘ノ法文ヲ、聴聞セリ、宿因、少ニアラス、コノツイテニ、我等、聖人ノ御坊ニ、尋マヒリ、出家ノ形ニナリ、ハナレカタキ、娑婆ノ火宅ヲイテ、生カタキ、浄土ノ菩提ニ、ウマレンコトヲ、ネンコロニ、カタリケリ<sup>(17)</sup>

と述べた後、法然のもとで「出家聚戒」<sup>(18)</sup>したと記されていることから、多くの罪を犯した者であっても、出家受戒によって極楽浄土に往生できることが示唆されていると思われる。

一方、法然の法語類などには、法然が九条兼実の北政所や正如房、鎌倉の二位の禅尼、大胡太郎実秀の妻室などの女性たちを教化していたことが記されているが、法然はこの女性たちに出家を勧めることはなく、著である『選択本願念仏集』に「故知念仏易故通<sub>ニ</sub>於一切<sub>ニ</sub>諸行難故不<sub>レ</sub>通<sub>ニ</sub>諸機<sub>ニ</sub>然則為<sub>レ</sub>令<sub>ニ</sub>一切衆生平等往生<sub>ニ</sub>捨<sub>レ</sub>難取<sub>レ</sub>易為<sub>ニ</sub>本願<sub>ニ</sub>歟（中略）然則弥陀如来法蔵比丘之昔被<sub>レ</sub>催<sub>ニ</sub>平等慈悲<sub>ニ</sub>普為<sub>レ</sub>撰<sub>ニ</sub>於一切<sub>ニ</sub>不下<sub>ニ</sub>以<sub>ニ</sub>造像起塔等諸行<sub>ニ</sub>為<sub>ニ</sub>往生本願<sub>ニ</sub>唯以<sub>ニ</sub>称名念仏一行<sub>ニ</sub>為<sub>ニ</sub>其本願<sub>ニ</sub>也」<sup>(19)</sup>と記されている通り、「称名念仏」が阿弥陀仏に選択された唯一の往生行で



あることを論証し、念仏を称えることですべての人が平等に往生できるという「専修念仏」の思想を導き出したことから、この思想を老若男女など問わずに一貫して説いていた。そして、『一百四十五箇条問答』には、「一。出家し候はねとも、往生はし候か。答。在家ながら往生する人おほし。」<sup>(20)</sup>とあり、出家していなくても極樂浄土に往生できるのかという問いに対して、在家のまままで往生する人は多いと答えていることから、法然が出家者と在家者という区別なく、称名念仏による往生を説いていたことが推察される。また、『平家物語』では、捕虜の身となった平重衡が法然から教えを受けている場面が次のように記されている。

今は頭をそり戒をたまちなんどして、偏に仏道修行したう候へども、かかる身にまかりなッて候へば、心に心をもまかせ候はず。(中略) 願はくは上人慈悲をおこしあはれみをたれて、かかる悪人のたすかりぬべき方  
法候はば、しめし給へ。(中略) 出離の道まち／＼なりといへども、末法濁乱の機には、称名をもッて勝  
れたりとす。心ざしを九品にわかち、行を六字につづめて、いかなる愚智闇鈍の者も唱ふるに便あり。罪ふか  
ければとて卑下し給ふべからず。(中略) 中将なのめならず悦びて、「此ついでに戒をたまたばやと存じ候  
は、出家仕り候はではかなひ候まじや」と申されければ、「出家せぬ人も戒をたまつ事は世の常のならひな  
り」とて、額にかうぞりをあててそるまねをして十戒をさづけられければ、中将随喜の涙をながいて是をうけ  
たまち給ふ。<sup>(21)</sup>

出家を許されなかった重衡に対する救いとして、法然は称名念仏の功德を説いた後、重衡の要望により「十戒」を授けられたと記されていることから、重衡が称名念仏だけでなく、受戒によって極樂浄土への往生を確固たるものにしようとする姿勢が見られる。法然と「戒」については、『選択本願念仏集』に「即今選<sub>ニ</sub>捨前布施持戒乃至孝養父母等諸行<sub>ニ</sub>選<sub>ニ</sub>取専称<sub>ニ</sub>仏号<sub>ニ</sub>故云<sub>ニ</sub>選択<sub>ニ</sub>也」<sup>(22)</sup>と記されていることなどから、持戒は阿弥陀仏の本願の行ではない

と説かれているが、法然は師である叡空の円頓戒を相承していることから、門弟たちに円頓戒を授け、信者の求めに応じて授戒や布薩の説戒を行っており、『本朝祖師伝記絵詞』（『四巻伝』）には、「上人は始は戒をときて人に授、後には教を弘てほとけになさしめ給<sup>(23)</sup>。」とあるように、法然が授戒や説戒の後に念仏の教えを説くという方法で人々を教化していたことが記されている。そして、戒に対する態度については、『一百四十五箇条問答』に「一。女房の聴聞し候に、戒をたまたせ候をやふり候はんすれはとて、たもつとも申候はぬは、いかゝ候へき。たゝ聴聞のにわにては、一時たもつと申候か、めてたき事と申候は、まことに候か。答。これはくるしく候はす、たとひのちにやふれ候とも、その時たもたんとおもふ心にて、たもつと申すはよき事にて候<sup>(24)</sup>。」とあり、聴聞の際に戒を保つと言えなかった女房に対して、たとえ後に戒を破ったとしても、その時に保とうと思う心によって保つと言うことは良いことであると説いていることから、法然が受戒した者に寛容な態度をとっていたことがうかがえる。

以上から、『松虫鈴虫讃嘆文』における法然の説法では、本来、法然が説いていた専修念仏の思想ではなく、地藏菩薩と獄卒の問答などを用いながら「出家の功德」が子細に説かれることによって、出家の優位性が示されていると思われる。そして、この説法を聴聞した松虫・鈴虫が無断で出家受戒したことにより、法然の流罪が定まった場面では、

聖人、コノヨシヲ、キコシメシテ、ウレシキカナヤ、ワレラ、此女人ノ出家ニ依テ、罪科ニ及ハンコト、三世ノ諸仏モ、十方ノ薩埵モ、イカハカリカ、随喜シ玉フラントテ、驚玉ハス<sup>(25)</sup>

とあり、物語の法然は、女性の出家を積極的に容認している人物としてえがかれていることから、このような思想が物語の中で説かれている背景には、中世の幅広い享受者の中でも、特に女性に向けて物語を布教するため、浄土宗もしくは浄土教系の門徒の手によって、法然の法語類などには見られない、新たな「法然思想」が作り出さ

れ、談義の場で説かれていたのではないかと考えられる。

### 三、『松虫鈴虫讃嘆文』と女性への布教について

中世の説話が談義・唱導の場によって生成され、利用されていたという様相が明らかになる中で、<sup>(26)</sup>『法華経』の注釈書や浄土宗の談義書、<sup>(27)</sup>浄土真宗の談義本などの研究から、<sup>(28)</sup>談義・唱導と「お伽草子」<sup>(29)</sup>との関係性が論じられてきている。

そして、『松虫鈴虫讃嘆文』では、法然の説法として「出家の功德」が説かれており、この説法を聴聞した松虫・鈴虫の懺悔には、

シカモ又、ワレラカカタチ、天下ニアハレミル人コトニ、思ヲカクルラン、コレニヨリテ、悪道ニ、ヲチシツマンコト、国王モ大臣モタスケタマハシ、公卿殿上人モ、カハリタマハシ、タ、身ニソウモノハ、ナミタハカリナルヘシ<sup>(30)</sup>

とあり、二人の容姿が多くの人の思いをかき乱したために悪道におちると述べていることから、女性の容姿が原因となって墮獄するという「女性罪業観」が記されており、物語では、これらの罪による墮獄を免れる方法として出家が説かれていると思われる。

「お伽草子」には、このような女性に対する罪業を記した物語が他にもあり、その一部として『有善女物語』では、「善導和尚ノ、オンコトハニ、世ハミナ、悪人ナリトイヘトモ、コトニ女ハ、悪業フカキモノナリ、汝、イカナル悪人悪縁ニアフトカ、トモニ、地獄ニオチンスラン、不便サヨト、オホセラレテ、オンカナシミ、アリシナ



リ<sup>(31)</sup>」とあり、『小男の草子』の絵詞には、「いとゞだに女房は罪深きと申に、かやうに物をおもはせぬ物かな。極楽へ御参り候事はなるまじく候<sup>(32)</sup>。」と記されている。そして、再建途中の東大寺で法然が導師となって大仏供養を行ったとされる『大仏供養物語』では、

サレハ女人ハ、三世ノ諸仏ニステラレタリ、女人ノ頂ニ、クツチノカナヘアリ、カタニ、火毒ノホムラアリ、腹ニ、剣ホクノ、ツルキノ山アリ、カクノコトクノ、不浄悪業ノトカヲ、身中ニツ、メルニヨリテ、女人ヲハ、トコシナヘニ、忌深、イマレスルモノト、説給ヘリ（中略） 女人ノ業障ノ深事、カクノコトシ、浅増キコト、カキリナシト云トモ、阿弥陀如来、広大無辺ノ御慈悲ニテ、四十八願ノ中ニ、第三十五ノ願ニ言、設我得仏、十方無量、不可思議、諸仏世界、其有女人、聞我名号、歡喜信樂、發菩提心、厭惡女身、壽終之後、復為女像者、不取正覺、ト、説タマヘリ<sup>(33)</sup>

とあり、法然は女性の罪業を説いた後に、阿弥陀仏の四十八願の第三十五願などを用いながら、女性の往生について説示していることから、『松虫鈴虫讃嘆文』も出家受戒による往生の思想だけでなく、懺悔する女性の言葉の中に罪業思想が組み込まれることによって、物語の享受者に罪業を意識させようとする働きが見られる。

また、法然の伝記類のうち、『松虫鈴虫讃嘆文』と話の構造が類似している『法然上人秘伝』は、法然やその周辺の人物に関する話を集成した書とされ、隆寛律師の撰述と伝えられているが、室町時代に談義僧によって編まれたことが推定されており、<sup>(34)</sup>『松虫鈴虫讃嘆文』と『法然上人秘伝』のどちらが先に成立したのかについては定かでないが、伊藤正順氏は『法然上人秘伝』は、その体裁から編集の際に『松虫鈴虫物語』か、あるいは『松虫鈴虫讃嘆文』（仮題）を座右に置き、その内容をほぼそのままの形で法然上人の伝記の中に挿入したものと考えられる<sup>(35)</sup>』と指摘した上で、相違点として「①『法然上人秘伝』に示されている土御門院の記述は、他の二本には記され

ていないこと。②『法然上人秘伝』では、両姫を出家させた法然上人を、朝廷側は六條河原にて斬首に処すと記しているが、他の二本には流罪に処すと記していること。<sup>(36)</sup>の二点を挙げているが、前掲の『松虫鈴虫讃嘆文』において、松虫・鈴虫の容姿が原因となり悪道におちると記されている場面が『法然上人秘伝』では、

又人身ヲ得タリト云五障三従ノ女人ナリ龍女韋提ニアラズンバ成仏シガタキモノナリ又我等ガ姿ナベテノ人ニハ似ズ天下ニ風聞アレバイカニ見ル人ゴトニ上下ヲキラハズ幾ク千万無量ノ思ノ多クカ、ルラン其ノ思ヒヲヤスメントスレバ邪姪嫉妬ノ罪深シ其ノ思ヲヤスメントスレバ慳貧係念ノ罪一トシテ遁レガタシ此ノ罪因ニ依テ地獄ニ落ナン時ハ国王大臣モ助ケ給ハジ公卿殿上人モカハリ給フベカラズ只ダ身ニソウモノハ影バカリ先立モノハ涙バカリナルベシ<sup>(37)</sup>

とあり、『松虫鈴虫讃嘆文』に記されていないなかった「五障三従」や「邪姪嫉妬の罪」、「慳貧係念の罪」という罪業に関する文言などが加筆されていることから、後に成立した『法然上人秘伝』は、より「女性罪業観」を強調して説いている話としてつくり出されたことが考えられる。

#### 四、おわりに

本論では、『松虫鈴虫讃嘆文』における法然の説法のうち、「出家の功德」の内容について検討し、その思想内容の考察を試みた。「出家の功德」は、本来、法然が説くことはなかった思想であるが、物語では、法然が「出家の功德」を称揚した上で、その根拠として地藏菩薩と獄卒の問答などを用いながら、特に女性に対する出家の思想を強調して説いており、この説法を聴聞した松虫・鈴虫が極樂浄土への往生を願って出家受戒していることから、

『松虫鈴虫讃嘆文』が法然の説法を記した「談義本」として談義の場で用いられることによって、本来の教えから大きく変容した「法然思想」が広く流布されたのではないかと思われる。

## 註

(1) 「お伽草子」とは、狭義には江戸時代中期までに大阪の渋川清右衛門が『御伽文庫』という名で『文正草子』や『鉢かづき』など二十三編の物語を版行していたことから、それらの叢書をさすが、広義では室町時代から江戸時代初期にかけて成立した四百種を超える短編物語の総称として用いられている。市古貞次氏は「お伽草子」の作者や享受者には、公家の他に武家や僧侶、商人、庶民などがいたことから、必然的に物語の素材や内容が新形態を持つに至ったと指摘されており(同氏『中世小説の研究』東京大学出版会 一九五五年)、「お伽草子」があらゆる階層を対象とし、その層に合わせて多種多様な物語としてつくり出されたことが考えられる。

(2) 『松虫鈴虫讃嘆文』の本文の引用には、『松虫鈴虫讃嘆文(仮題)』(『室町時代物語大成』第十二 角川書店 一九八四年 六二六頁―六三二頁)を用い、旧字体を新字体に改め、私に句読点を施した。また、現在この写本の所蔵場所については不明であるが、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫にマイクロフィルムが所蔵されている。

(3) 『松虫鈴虫物語』(『真宗史料集成』第五巻 談義本 同朋舎出版 一九八三年 六七四頁―六七八頁)

(4) 『法然上人行状絵図』(『四十八巻伝』)では、いつの出来事かは定かでないが、法然が清水寺で「説戒」のついでに「念仏」を勧めたことによって、文治四年(一一八八)滝山寺を道場として「不断常行念仏三昧」が始まったとされている。この話は、法然の伝記類のうち初期に成立したとされている『源空聖人私日記』や『法然上人伝記』(『醍醐本』)からは確認できないが、『本朝祖師伝記絵詞』(『四巻伝』)、『法然聖人絵』(『弘願本』)、『法然上人伝絵詞』(『琳

阿本』、『拾遺古徳伝絵』、『法然上人伝記』（『九卷伝』）には記されており、そのうち『本朝祖師伝記絵詞』（『四卷伝』）では、「後鳥羽法王御宇建久元年秋清水寺にて上人、説戒の座に念仏すゝめ給ければ、寺家大勧進沙弥印蔵、滝山寺を道場にて不断常行三昧念仏はじめける。」（『法然上人伝全集』 井川定慶氏出版 一九五二年 四七八頁。本文の引用にあたっては、旧字体を新字体に改めた。）とあり、建久元年（一一九〇）に法然が清水寺で説戒した時に念仏を勧められたと記されていることから、『松虫鈴虫讃嘆文』は、この建久元年の出来事を題材にしていると考えられる。

（5） 元久元年（一二〇四）に延暦寺が、元久三年（一二〇六）には興福寺が顕密八宗を代表して専修念仏禁止を上奏し、法然と弟子の安楽・幸西・住蓮・行空の処分を要求した結果、朝廷は安楽と行空の配流を認めたが、結果的には実施されず、法然に自粛を求めるだけであつた。しかし、同年の十二月に後鳥羽上皇が熊野へ臨幸中に、安楽らと院の女房との「密通事件」が発覚したことによつて上皇は激怒し、建永二年（一二〇七）に専修念仏禁止令が發布され、弟子の安楽・住蓮・善緯・性願が死罪となり、法然も配流となつた。「密通事件」の真偽については定かでないが、平雅行氏はこの事件が契機・触媒となり、朝廷が専修念仏を異端と認定したことによつて、専修念仏の弾圧が行われたと指摘されている（同氏『日本中世の社会と仏教』 塙書房 一九九二年）。

（6） 「談義」とは、人々に仏教の法義や宗旨について説き明かすことであり、「談義本」とは、談義の際に談義僧がテキストとしていた本であり、宮崎圓遵氏は談義本の定義について、「今談義本の他の書物と区別されるところの特色とも云ふべきものを一言するならば、その説くところの教法は煩雑な教義的説明よりも、寧ろ達意的な平易な叙述であり、而もその理解を助け、所説の効果を大きくするために、種々の因縁説話を交へたものと云つて大過ないであらう。」（同氏『真宗書誌学の研究』 永田文昌堂 一九四九年）と指摘されている。

- (7) 『松虫鈴虫讃嘆文』の先行研究については、伊藤正順氏「『安楽寺略縁起』の成立過程に関する研究―専想寺所蔵・談義本『松虫鈴虫物語』とその周辺―」（『西山学会年報』第七号 一九九七年）、同氏「『安楽寺略縁起』に関する二・三の問題―住蓮房の身代わり説と『松虫鈴虫和讃』―」（『日本仏教文化論叢』上巻 永田文昌堂 一九九八年）、同氏「伝隆寛律師撰『法然上人秘伝』の一考察」（『西山学会年報』第十二号 二〇〇二年）などの一連の研究や、三浦億人氏「松虫鈴虫讃嘆文」項（徳田和夫氏編『お伽草子事典』東京堂出版 二〇〇二年 四四九頁）、引野亨輔氏「偽書の地域性／偽証の歴史性―生口島の法然伝説を事例として―」（『福山大学人間文化学部紀要』第五巻 二〇〇五年）、浅野睦美氏「『松虫鈴虫讃嘆文』における母の役割―孝養を中心に―」（『弘前大学 国語国文学』第三十一号 二〇一〇年）など参照。

(8) 前掲注2同書 六二六頁。

(9) 前掲注2同書 六二六頁―六二七頁。

(10) 前掲注2同書 六二七頁。

(11) 『平家物語』巻第二 座主流（『平家物語』① 新編日本古典文学全集45 小学館 一九九四年 九十六頁）

(12) 『出家功德御書』（『昭和新修日蓮聖人遺文全集』下巻 平楽寺書店 一九三四年 一八四二頁）本文の引用にあたっては、旧字体を新字体に改めた。

(13) 『二百四十五箇条問答』（『昭和新修法然上人全集』平楽寺書店 一九五五年 六五六頁）本文の引用にあたっては、旧字体を新字体に改めた。

(14) 前掲注13同書 六六二頁。

(15) 『二百四十五箇条問答』の中で法然が尼法師（女性）に厳しい答えを返している点に関しては、川内教彰氏の論考

法然思想の受容をめぐる



から、摂関期から院政期にかけての上流貴族の既婚女性の出家は晩年であり、極楽浄土への往生のために善根功德を積む時間的余裕のなかった女性は、厳しい修行に専念していたとされることから、剃髪して尼になった以上、戒律を護りながら一向専修念仏の功德を積んで欲しいとの考えから、厳しい回答となったのではないかと指摘されている（同氏『二百四十五箇条問答』の「罪」をめぐる（『仏教学部論集』第一〇一号 二〇一七年））。

- (16) 『大智度論』卷第十三に引かれている『優鉢羅華比丘尼本生経』（『大正新脩大藏経』二十五・一六一a—b）では、仏が在世の時、優鉢羅華比丘尼は貴人や婦女に出家を勧めており、貴婦女は容姿の美しさなどから戒を保つことは難しく、戒を破ってしまうと言うが、この比丘尼は自身の前世を語った上で、ただ悪を作り戒の因縁が無ければ道を得ることはできないが、出家して戒を受ければ、たとえ戒を破っても、戒の因縁によって阿羅漢道を得ることができると言っていることから、『大智度論』が引用している『優鉢羅華比丘尼本生経』の思想が『松虫鈴虫讃嘆文』の地藏菩薩と獄卒の問答に影響を与えていることが考えられる。

- (17) 前掲注2同書 六二八頁。

- (18) 前掲注2同書 六二九頁。

- (19) 『選択本願念仏集』（石井教道氏『選択集全講』 平楽寺書店 一九五九年 一八五頁）本文の引用にあたっては、旧字体を新字体に改めた。

- (20) 前掲注13同書 六六二頁。

- (21) 『平家物語』卷第十 戒文（『平家物語』② 新編日本古典文学全集46 小学館 一九九四年 二八〇頁—二八二頁）

- (22) 前掲注19同書 一七六頁。

- (23) 前掲注4同書 四八四頁。
- (24) 前掲注13同書 六五三頁。
- (25) 前掲注2同書 六二九頁—六三〇頁。
- (26) 前掲注6宮崎圓遵氏同書、岡見正雄氏「小さな説話本—寺庵の文学・桃華因縁—」(『室町文学の世界』 岩波書店 一九九六年 初出一九七七年)、高橋伸幸氏「浄土系直談と説話—標題説話の背景(上)・(下)—」(『大谷学報』 第七十一卷 第三号・第四号 一九九二年)、廣田哲通氏「談義・直談」(説話の講座第三卷『説話の場—唱導・注釈—』 勉誠社 一九九三年) など参照。
- (27) 永井義憲氏「講經談義と説話—『鷲林拾葉鈔』に見えるさゝやき竹物語—」(『日本仏教学研究』 三 新典社 一九八五年 初出一九七三年)、廣田哲通氏『中世法華經注釈書の研究』(笠間書院 一九九三年)、近本謙介氏「輻輳する伝承の層—『直談因縁集』と中世物語・語り物文芸—」(伊井春樹氏編『古代中世文学研究論集』 第三集 和泉書院 二〇〇一年) など参照。
- (28) 徳田和夫氏「三心談義と説話—室町期逸名古写本の紹介—」(『日本文学史の新研究』 三 弥井書店 一九八四年)、近本謙介氏「浄土宗談義書における説話覚書(一)」(『詞林』 第八号 一九九〇年)、高橋伸幸氏「講經の中の説話」(『中世文学』 第三十六号 一九九一年)、上野麻美氏「『当麻曼陀羅疏』と常陸—聖聡の説話享受—」(『仏教文学』 第二十四号 二〇〇〇年)、恋田知子氏『仏と女の室町—物語草子論—』(笠間書院 二〇〇八年)、同氏「浄土宗談義と説話・物語草子—隆堯の著作・書写活動を端緒として—」(『説話文学研究』 第四十七号 二〇一二年) など参照。
- (29) 前掲注3千葉乗隆氏解説、黒田佳世氏「『阿弥陀の本地』と浄土真宗—仏教大学図書館蔵本と新出慈願寺蔵本をめぐって—」(『説話文学研究』 第三十六号 二〇〇一年)、箕浦尚美氏「談義と室町物語—真宗の談義を中心に—」(伊

井春樹先生御退官記念論集刊行会編『日本古典文学史の課題と方法―漢詩 和歌 物語から説話 唱導へ―』和泉書院 二〇〇四年、同氏「談義唱導とお伽草子」(徳田和夫氏編『お伽草子 百花繚乱』笠間書院 二〇〇八年)など参照。

(30) 前掲注2同書 六二八頁。

(31) 『有善女物語(仮題)』(慶応義塾大学斯道文庫蔵写本)『室町時代物語大成』第二 角川書店 一九七四年 五二〇頁

(32) 『小男の草子』(天理図書館蔵絵巻)『室町物語集 上』新日本古典文学大系54 岩波書店 一九八九年 三六七頁

(33) 『大仏供養物語』(神宮文庫蔵写本)『室町時代物語集』第四 井上書房 一九六二年 三二四頁)本文の引用には、旧字体を新字体に改め、私に句読点を施した。

(34) 井川定慶氏『法然上人絵伝の研究』(井川定慶氏出版 一九六一年)

(35) 前掲注7伊藤正順氏「安楽寺略縁起」の成立過程に関する研究―専想寺所蔵・談義本『松虫鈴虫物語』とその周辺― 二十八頁。

(36) 同右。

(37) 『法然上人秘伝』下(『浄土宗全書』第十七巻 山喜房仏書林 一九七一年 二十五頁)本文の引用にあたっては、旧字体を新字体に改めた。